

## 日本と開発途上国を結び みんなを元気にしたい

国際協力に取り組む日本の地域に寄り添いたい。JICA地球ひろばの奥村真紀子さんは、地方自治体やNGOなどと連携し、日本と開発途上国双方にとってプラスとなる事業の在り方を模索している。

### お世話になった 人たちに恩返しを

環境問題に関心を持っていた大学生の時です。熱帯雨林の減少は、実は、企業による大規模な伐採が主な原因であること、そもその原因といわれていた焼畑は、現地の人々の知恵に基づいた持続可能な農法だったことを知りました。思い込みで判断してはいけません。そう実感すると同時に、伐採の舞台となっていた開発途上国の人たちの生活や本来の農法について知りたいと思うようになりました。

そこで大学院では3カ月間、インドネシアの農村で調査。その時に出会った現地の人たちは、とても親しく接してくれました。ご飯を作ってくれたり、農家の現状を教えてくださいと、彼らの支えなしでは調査はできませんでした。中でもホームステイ先のお母さんはとても気さくで、インドネシア語で「サブ(ほうぎ)を貸してください」「サブ(牛)を貸してください」と言い間違えてしまったらツツコミを入れてきたりと、いつも私を楽しませてくれました。

一方で、小さな村でさえ、食べるだけで精いっぱいの家から、ビジネスとして農業に投資している家まで、身近に貧富の差がある現実を目の当たりにしました。人々の温かさや彼らが直面する課題に触れ、調査では何もできなかつた自分を振り返り、将来は彼らに恩返しできるような仕事をしたいと思うよう

になりました。

### 国際協力は国内の人々に 支えられている

最初に配属された森林・自然環境協力部(当時)では、水産分野の協力を担当しました。その一つがチリでのプロジェクト。現地の養殖技術者に日本の技術を学んでもらうため、ホタテの名産地として知られる北海道南部、鹿部町にある団体に研修を受け入れてもらいました。私も同行したのですが、「誰かの役に立てるなら」と、ホタテ養殖の技術を懸命に伝えようとする地元の人たちの姿には心を打たれました。研修員もその熱心な指導に感銘を受け、必死に技術を学び取ろうとしていました。日本国内にも途上国に貢献したいと思っている人がたくさんいる。彼らにもっと寄り添ってできることはないかと考えるようになりました。

次の国内事業部では、国内のNGOや大学、地方自治体などと連携して途上国の課題解決を目指す「草の根技術協力事業」の立ち上げに携わりました。新しい制度のため、まさに全て手さぐり状態。周りの人の意見も取り入れながら、チーム一丸となって何とか実施にこぎつけました。

### 地域の人たちとの 連携を深める

現在は地球ひろばで、日本人の良さ、地



JICA地球ひろば  
地域連携課  
主任調査役  
**奥村真紀子**  
OKUMURA Makiko

大学院卒業後、2000年にJICAに就職。森林・自然環境協力部(当時)、国内事業部、総務部、ヨルダン事務所を経て、2011年6月から現職。

域の強みを生かした国際協力を模索しています。その一例が農業が盛んな群馬県の甘楽富岡地域。NPO法人自然塾寺子屋が橋渡し役となり、派遣前の青年海外協力隊員や途上国からの研修員に、農業や農産物加工などの技術を伝えています。

この研修には、農家や女性グループなど、実に多くの地元の方々が協力してくださっています。彼らに甘楽富岡での研修がどう途上国で役立つのを見てもらいたいと、昨年、甘楽富岡の代表者とマラウイに行きました。農家の皆さんも研修を受けた協力隊員がたくましく活動している姿を見て、途上国や国際協力をより身近に感じる事ができました。

この他にも国内には、日本の若者や研修員との交流が地域活性化に役立っている例がたくさんあります。そして私たちは、そんな地域の方々から元気をもらっているのです。私は双方の現場を知る立場として、両者をつなぎ、みんなが明るく前を向いて進める世界になっていけばと思っています。



鹿部町で研修を担当した日本人のスタッフとチリの研修員と



甘楽富岡で研修を受けた協力隊員の活動状況について、派遣先のマラウイの担当者に聞く奥村さん(左)